

# 自分にできることを

県立伊奈学園中学校

三年 原口 結衣

土砂災害とは、すさまじい破壊力をもつ土砂が、一瞬にして多くの人命や住宅などの財産を奪ってしまう恐ろしい災害のことだ。

土砂災害が発生する主な原因の一つとして大雨がある。毎年、夏から秋にかけて多発する台風による土砂災害のニュースをよく見かける。私の住んでいる埼玉県では最近、大雨による大きな被害は特にない。しかし、大きなくくりで関東として見ると関東地方が最近受けた最も大きな台風は令和元年の台風十九号だ。

これは、令和元年十月十二日に起きた災害である。関東地方に限らず、新潟県や静岡県、甲信、東北地方などに記録的な大雨を降らせ、大規模な被害と多くの犠牲者をうんだ災害だった。私は川が氾濫している様子の映像や家が土砂でつぶされている様子の映像、台風十九号による被害を受けての死傷者についてのニュースが何度も何度流れてくる度にこのようなことが現実でも起こるのだという衝撃と自分がただ見ているだけという無力さをしみじみと感じていたことを今でもよく覚えている。

他の地域で災害が起きているとき、私達が直接現地へ行って救助活動を行うことは難しい。少しでも何かできることはないかと思ひ、土砂災害やその他の災害について調べてみた。

すると、それぞれの災害が起きてしまう原因が必ずある

ということがわかった。例えば、土砂災害ならば気象状況だけでなくその場所の地形や地盤の様子などが関係している。天候については自分達の力で変えることはできない。だから、国土交通省やボランティア団体は災害に備えて木を植えたり、地盤を強くするための取り組みをしているのだと思う。もちろん、過去にあったような大雨による大規模な土砂災害を想定して。

過去に起こった災害を出来事として覚えておくのではなく、もし同じことが起きたらどのようなようにすればいいのか、出来事がしつかりとたくさんの人の心に残り次へと生かされていることを知り、とても嬉しい気持ちになった。それと同時に、教訓を残すことの大切さ、後世へとつないでいく大切さを改めて感じた。

私の父は防災に関する仕事をしている。関東地方で地震や大雨などの自然災害が発生したときに会社の人と連絡を取り合つて様々な対応をしなければならぬ。被害が大きかったら現地へ資源物資を届けに行くこともある。実際に、関東地方で大雨が降ったときや、その他の地域で大規模な地震が起きたときに忙がしそうにしている父を何度か見かけたことがある。

私の父は災害や防災について詳しいため、自然災害などについてのニュースを見ていて疑問に思ったことをよく父に質問している。ある時、私はなぜ学校の理科や社会の時間に自然災害や防災について勉強するのか疑問に思い父に質問してみた。すると父は「命を守るために勉強している」と答えた。私はその時、あまり深く考えずにそりやそうだなと納得した。今、考えてみるとこの勉強も過去の悲劇をもう一度起こさないために行っていることなのだと思ひ付いた。もし、自分の身のまわりで災害が発生すればき

つと慌てて、何をすればよいのかわからなくなり正しい行動ができなくなってしまうかもしれない。そんな中、若者である私達が行動できないとなると助かる命も助からなくなってしまう。

私達に何ができるのか。私はもう中学三年生で自分の意思で動くことができる。誰かからの指示を待たずに自分でできることをその場ですぐに行わなければならない。

災害時、地域で働いている人たちだけでは住人全てを安全に避難させることは難しい。パワーや元気で満ちあふれている中学生や高校生が大きな声をかけて避難の手伝いをすることができれば救える命も増えるはずだ。

私たちの安全は自分たちの対策だけでは成り立たない。何をするにも自分以外の誰かの助けが必要である。また、自分以外の誰かにとっては私の助けが必要になってくる。誰かに守られているだけでは過去の悲劇を何も生かしていかないことになる。教訓として生かされた過去の悲劇を無駄にすることはもつたいたない。誰かを助ける側として自分ができることを探していかななくてはならない。

いざとなったら自分たちがどこを通ってどこへ行くのか。日頃から意識を変えていこうと思う。自分以外の誰かを助ける人として。